
幸せは少ししかいない アナザーストーリーズ

如月ひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せは少ししかいらない アナザーストーリーズ

【Nコード】

N0651F

【作者名】

如月ひつじ

【あらすじ】

『幸せは少ししかいらない』から語り手の違うエピソードを別にもとめることにしました。

彼女と彼女の事情

ため息が聞こえた。

窓の外を見ると、初夏らしい青空だった。まだ暑くないさわやかな日の昼下がりで。

個人用ロッカーから弁当の包みを取り出し、くるりと教室を見渡すと、ほんの数人の生徒がいるだけだった。残りは購買か学食かを利用しに行っている。そんないつもの昼休み。

また、ため息が聞こえた。

ため息の主は、窓際の一番前の席で頬杖をついて外を見ていた。うーちゃんだ。高校で一緒のクラスになったこの春から友達になった、小さい、天然、頑張り屋という三拍子そろった愛らしい子だ。ここ最近、彼女は気がつけば物憂げにしている。

近くの席から椅子を借りて、うーちゃんと向かい合うように座った。

「あ、矜ちゃん。おべんとなんだね」

私に振り返ったうーちゃんは、にっこりと笑った。ああ、まただ。こういう顔をされたら、なんだかつっこんだ話は聞きづらい。

「いつもの月初ピンチよ」

心配が顔に出ないように気をつけながら、うーちゃんが机から出した弁当を眺め見る。

「うーちゃんはサンドイッチか。私はおむすびにしてみた」

「中身はなあに？」

「梅とおかかとシーチキンマヨと焼いたソーセージ」

などと、楽しく話をしていたら、こちらに近づいてくる男子が視界のすみに止まった。くるりと振り向くと、彼はなぜか苦笑いになった。

「どうしたサタケ」

「いや、番長にじゃなくて、榊山さんにね」

「あたしにですか？」

「うん。お客さんが来てるよ。ほら」

サタケが指さした教室の扉のそこには、背の高い男子が立っていた。見たことのない顔だ。

「あつ、トモにい」

うーちゃんが小さくつぶやいて駆けていった。

「あれ誰？ サタケ知ってる？」

「三年の新山先輩。クラス委員会で何度か会ってるだろ。ほんと、興味ない人の顔を覚ええないね、番長は」

「いやいや、私は忘れるのが得意なんだ」

ああ、そう言われれば月一の会議にいたかも。その集まりはクラス委員長と副委員長が出席しての各組で問題がないかの報告検討会なんだけれど、なんとなく見た目が委員長っぽいという理由で選ばれた私は、あまり熱心に参加していないのだ。サタケは副委員長で、実質的なことは全部彼がやってくれている。どこにでも貧乏くじをひきたがるヤツはいるもんだ。

「ところで、前から気になっていたんだけど」

サタケが少しだけ顔を近づけて、声をひそめてきた。

「どうして榊山さんが、うーちゃんなの？」

なんだ、どんな重要な秘め事を質問してくるのかと心構えたのに、損をした。まあ、うーちゃん誕生については紆余曲折があったんだけど、いちいち細かく説明してやることもない。

「それはねサタケ、あんたが副長と呼ばれ、私がいわれもなく番長と呼ばれているのと同じ原因よ」

「なるほどー、名付け親が誰なのかはわかったけど、由来はさっぱりだ」

細かい男だ。

「うーちゃんの誕生日知ってる？」

「四月一日だよ。それと関係が？」

察しの悪い男だ。

「そんなに知りたければ、本人にでも聞けばいいでしょ。なんで私に聞くの」

サタケは、うーんと唸ってから神妙そうな顔になった。

「榊山さんとは、長く話をできる自信がない……」

「なんでまた？」

うーちゃんは男子からも話しやすい子だと思うけれど。

サタケは、さらに深刻そうに見える表情になった。

「あそこまで無防備に可愛いと、好きだと勘違いしてしまいそうではないや、それって好きってことなんじゃあ？　って、私に対しては平気ってことか。それはそれで傷つくよ。」

ちらりとうーちゃんの様子を見やると、なにやら嬉しげにしていた。おーおー、ほっぺなんか赤くしちゃって、ほんと可愛いなあ。

「あ、そ。じゃあ、ネネは？」

ネネというのは、あだ名の名付け親だ。これもあだ名だけれど。

「鈴木さんとは、うまく会話をできる自信がない」

「それはどうして？」

聞くとサタケは、今度は塩のつもりで砂糖をかけたゆで卵を食べたみたいな顔をした。ちつとも美味しそうじゃない。

「えーと、うんと、彼女はほら、なんというか、とても個性的で」

「よーするに変すぎて会話にならないと？」

「まあ、そういうことかな」

「だ、そうよ？」

私は、サタケの背後にちよつと前から立っていたネネに声をかけた。ネネは、悪巧みを思いついたニヤリ顔をしていた。

一拍遅れて振り返ったサタケは、きつととんでもなく面白い顔をしていることだろう。

「いやあ、鈴木さん」

「え？　嫌、鈴木さん？　どんだけ嫌いななの？」

「そんなこと言ってないって」

困ってるなあ、サタケ。その背中では、何も語らないけれど。

「嫌いじゃないの？　じゃあ好き？」

「え、なんでそんな展開」

「お話したくないって思うくらい強い想いなら、好きか嫌いかわからないでしょっ」

それはどんな理屈だ、ネネ。

「そ、そうかな」

流されてるし。

「うん。どっち？」

目をうるうるさせてネネは小首をかしげている。これは、サタケ落ちるかな。

「どちらかというと、すっ、好きかな」
落ちた。

「そう。私は、副長のこと大っ嫌いっ」

ネネ、そんないい笑顔で言うセリフじゃないよ、それ。

サタケは、よくわからない奇声を上げて教室を出て行った。隣れだな、サタケ。同情しかないけれど。

「あー面白かった。副長ってかわいいよねー」

ネネとは中学からの付き合いだけど、何を考えているのかはサッパリ読めない。男がかわいくてどうするんだ？

「それはよくわからないけれど、あんましサタケをいじめるなよ」

「さすが番長は舎弟に優しいねー」

いや、私、番長違うし。どうせ言っても聞かないだろうから、反論はしないけれど。

「わたしねー、昔から副長みたいなタイプが目についちゃって。なんか、からかいたくなるんだよねー」

悪魔かこいつは……ん？　気になる子にいたずらしたい小学男子のほづが近いかな。

「あ、そ。そうだとしても、ほどほどにね。本当に嫌われてもつまらないでしょ」

ネネは右手の人さし指をあごに当て、しばらく黙ってからニコッ

と笑った。

「んー、それはそれで」

ホンモノか、こいつは。何か、までは言及しないけれど。

「あー、ネネちゃんおかえり」

うーちゃんが戻ってきた。まだちよつと顔が赤い。

「ただいま。そーゆーうーちゃんもおかえり」

「うん、ただいま」

うーちゃんが席に座り、ネネも購買で買ったのだろーパンをぼてぼてと机に落としてから隣の席の椅子を借りてきて座った。ふうん、焼きそばパンとたこ焼きパンか。ソースと青のりに恋でもしているのか。そしてポケットからコーラなのか。

「んで、あの三年はうーちゃんの何なの？」

いきなり直球だなあ。そう言っただけで焼きそばパンの包みを解いているネネは、動物の耳があつたらピコピコさせてそうなくらい好奇心と期待を全面に出していた。

対してうーちゃんは、きょとんととして、窓の外を見て、私を見て、それからネネを見て、やっと口を開いた。

「にいやませんぱいは、あたしのいとこだよ」

落ち着け、うーちゃん。インコの失敗した発声練習みたいになつてよ。

「へー。いとこが何しに来てたの？」

「あーうん。あたしのうち、ちよつとゴタゴタしてて、しばらくお世話になるかもしれないから、色々と……」

ああ、さっきまでいっぱいいっぱいでも元気に見えていたのに、あつという間にしおしおに。

私は右手をギュツと握った。ネネの能天気な脳天に鉄槌をお見舞いしてやろー、そう思った矢先にネネが言った。

「うーちゃん。がんばれっ」

びっくり顔のうーちゃんが、ネネに横から抱きしめられた。立ち上がったネネがうーちゃんの頭を抱え込むようにしていたので、そ

の胸に隠れてうーちゃん表情は見えない。耳が赤い。照れているのかな。

「なんか大変そうだけど。わたしと番長がついてるよっ」

おお、いいこと言った。

「そうだよ。私たちがついてるよ」

そう言つて、うーちゃんの頭を撫でてみた。髪がふわふわで、とても温かった。そして、小刻みに震えていた。耳が紫だった。あ、ネネ、窒息してる！ うーちゃん窒息してる！

「うそんっ」

ネネから解放されたうーちゃんは、ほにゃほにゃになっていた。目を回しているが、なんだか幸せそうだ。

「死ぬかと思つたー」

「私は自分のおっぱいが恐ろしいよっ」

「いやかましい！」

ごつすと私のチョップがバカの側頭部に炸裂した。どんな着痩せ系隠れ巨乳だ、このっ。

「いたいよ、ばんちょう」

そんな涙目で訴えてもダメ。むしろ腹立たしい。

「もうちょつと加減つてものを考えなさい」

「なるほど。おっぱいのご利用は計画的にだねっ」

ごつす。

「おまいはそれで、第一級殺人でもする気か！」

「本気で痛いよ。番長こそ、加減てものを知るといいよ」

ああ言えばこう言う……

「矜ちゃん、乱暴はよくないよ」

うーちゃんがじーっと私を見ていた。うう、そんな目で見ないで。

「あ、うん。そうだね。手を出したのは悪かったよ。ごめんね、うーちゃん」

「なんでわたしにじゃなくて、うーちゃんに謝るのさっ」

「いや、だって、うーちゃんをびっくりさせて悪かったとは思っけ

ど、ネネにはちつとも悪いことしたと思わないし。だってこれ、ツッコミだから」

「嘘だっ!」

嘘だよ。

「矜ちゃん?」

「プロのツッコミはいい音の割には痛くないらしいけど、私はまだ修行中の身だからね」

にっこり笑ってやると、うーちゃんはそーなのかーという顔になった。可愛いなあ。

「どこの世界にツッコミの修行してる番長がいるのさっ」

「相方がボケなんだから、仕方ないじゃない。神様のミスキャストだよ」

ひらひらと手を振ると、ネネはぐつと押し黙った。

「……こうなったら、うーちゃんがツッコミをやるしかっ」

それは無理だろ。うーちゃん、天然だし。

「え、あ、あたしがんばるよ!」

天然だし……ま、元気になったみたいでよかったけれど。

「それは頑張らなくていいから」

「ええー?」

ものすごく心外そうなうーちゃんに、私はなるべく優しく見えるように微笑んだ。

「さっき言ったこと、ほんとだからね。私がついてるよ」

「わたしもだよー」

「ああ、私とネネがついてるよ」

ニコツと笑ったネネ、そして私を順に見たうーちゃんの目には涙が浮かんでいた。初めて見た、うーちゃんの泣き顔。胸の辺りももやもやする。うわっ、もらい泣きしそう。

「あついがとうっ」

うーちゃんの泣き声。

もうダメだ。

私はネネの肩をトンと押した。

「ほらネネ、出番だ」

「おまかせだよっ」

再びネネがうーちゃんに抱きついた。私はぼやけた視界でそれを確認すると、誰にも見られないうちに目許をぬぐった。

「ネネちゃん苦しいよ」

「ダメ、まだこうしてるの」

今度はネネも学習したのか、うーちゃんは言うほど苦しそうには見えなかった。

「うーちゃんはさー、ばやばや可愛いけど、甘えたりってしないよねっ。頑張り屋さんなところは大好きだけど、つらいの隠した笑顔は見たくないよっ」

「ねねちゃんっ」

わんわん泣き出したうーちゃんを抱いてるネネは、とっても幸せそうだ。

ネネはいいやつだ。友達をちゃんと見ているし、こういうことを臆面も無く言えるところなんて、正直、うらやましいと思う。

私は、弱いな。

なんだか感傷的な気分になったので、なんとなく空を見上げてみた。

空は、青くて、青くて、ばやばやとしていた。うわっ、まただ。

「ばんちよう？」

「きようちゃん？」

二人の驚いた声に振り返った私は、自分の頬を涙がひとしずく流れたのを感じた。

「どうしたの？」

「あ、いや、うーちゃんの涙見てたら、つい」

「番長の目にも涙だねっ」

「ごっす。びっし。」

脳天と胸に同時にツツコミを受けたネネが、崩れ落ちるようにし

て椅子に座った。

「いたいよ、ふたりとも」

涙目で訴えるネネに、うーちゃんはツツコミを入れた手を引っ込めて、小首をかしげて口を開いた。

「なんでやねん」

遅いよ、うーちゃん。

「完全無欠のてんねんだ……」

なにやら絶望的な顔でつぶやいたネネの前からコーラの缶をつまんでプルタブを開け、私はくいつと一口飲んだ。すぐに気づいたネネが、抗議の視線を向けてきた。

「あー、なにをするのっ」

「喉が渴いたんだ。おかげでツツコミそびれたよ」

「どんな理由だよ。この人でなしっ」

「ネネ論では、私は鬼と同格だからいいじゃない。うーちゃんも飲む？」

「え、でも、いいの？」

うーちゃんと見詰め合ったネネは、パチパチと瞬きしてから何度も頷いた。

私の手から缶を受け取り、うーちゃんが飲み口に唇をつけた。

「間接キスだねっ」

ごっす。びっし。

「なんでやねんっ！」

うん、絶妙のタイミングだよ、うーちゃん。その調子だ。

ネネは左手で頭をさすりながら、右手を握って親指だけをぐっと上げて見せた。

「ぐっじょぶだよっ、うーちゃん」

私も黙って頷いて同意した。

「そ、そうかな」

うーちゃんは照れながらも嬉しそうだ。

「これからその意気だよ。だから番長はツツコミ引退宣言だよっ」

「わかった。わかったから、そんな必死な目で見るな」

脳天ど突き続けて、これ以上バカになられても困るしな。

「わかればいいよつ。うーちゃんもコーラ返して。お昼食べよー」

「あ、うん」

すまなそうなうーちゃんからコーラを受け取って、ネネはそつと口をつけた。頬が緩んでいる。なんでこいつは、そこはかとなく幸せそうなんだ？

うーちゃんを見ると、いそいそとサンドイッチを取り出していた。ネネの様子に気づいたそぶりはない。

ネネに視線を戻すと、いつもの様子で焼きそばパンをかじっていた。

ま、いつか。

私もおにぎりを手にとって口に運んだ。

「うぐっ」

すっぱい。梅だった。

翌日、私の肩書きが『情に厚く涙もろい』メガネ番長クラス委員長になっていた。括弧部分が追加分だ。

じつす。

柔の決断（前編）

目覚ましに起こされる朝は、清々しいというわけにはいかない。無理矢理に、しかもなんの温かみもない無機質な音に眠りを妨げられる朝は、だからいつも不快だった。

手を伸ばして頭の上のカーテンを開けると朝日に目が眩んだ。どこかくすんだ青空を小鳥が二、三羽飛んでいた。いつもの、どうとということのない朝。

ベッドから身を乗り出して目覚しを叩きつけ、義務感だけで寢床からずると這い出した。ふらふらと洗面所に行き着くと、鏡には半眼の自分が映っていた。低血圧で冷え性で、さらに一昨日から始まったアレのおかげで胃の下あたりが痛み、ひどい顔をしていた。とても人には見せられない。特にあの人には……と穏やかな笑顔が思い浮かんで、次に昨夜のことを思い出した。上昇しかけた気分が、一気に落ち込む。全部アレのせいだ。

意識すると、余計に下腹がきりきりと痛んだ。

気分を変えようと蛇口を捻った。冷たい水で顔を洗うと、身が引き締まるような気がする。

もちろんそれだけでは洗顔として不十分なので、お湯を出しつつ洗顔料を手に取る。「じゃくさんせい」とCMソングを口ずさみ、十分に泡立てた。

と、自分を客観的に見る部分が頭の片隅で囁いた。

「バカみたい」

口に出して言ってみる。ほんと、バカみたい。これは口癖だった。一人暮らしを始めて六年間、気付けば口にしていた。

浅い溜め息。すうっと息を思い切り吸って、力任せに顔を洗った。綺麗にすすいで顔を上げる。どこか気弱な顔をぱんぱんと叩いた。笑ってみる。いつもどおりの笑み。気さくな笑顔。

「よし」

今日も大丈夫。ちゃんと私はやれるんだと自分に言い聞かせて、もう一度頬を叩いた。

コーヒを口に含んで、うーんと唸る。別にコーヒが苦いとかぬるいからではなく、読んでいた書類のせいだった。進路希望と題したアンケート用紙。高校三年の五月だというのに、具体的な進路を考えていない生徒があまりにも多かった。担任として、これは困ってしまうしかない。

「大変そうですね」

おっとりとした声はおキヨさんだ。本名は相沢貴代子。古典的大和撫子な風貌のために、誰もがおキヨさんと呼ぶ。職員室で机を並べる一年後輩の英語教師で、私の無二の親友だ。

放課後すぐの職員室には、なぜかいつも私達二人しかない。

おキヨさんは湯飲み片手に小テストの採点をしていた。今は手を休めて、体ごとこちらを向いている。湯飲みの中身は、私のカップにあるのと同じく彼女が淹れてくれたものだ。湯飲みにコーヒ。こういうセンスは、正直なところ変だと言えない。悪いコじゃないんだけど、というほどずれてないけど、いいコなんだけど、というほど問題は少くない、そんなコだ。

「来年はおキヨさんの番でしょ。他人事じゃないよ」

「あまり実感が、ないですね」

「私だってまだ実感ないよ。でも、私の受持ちが今年度いっぱい卒業するのは当然のことだし、おキヨさんのクラスが来年三年になるのは順当なことですよ」

「無事に卒業するといいですね」

「さらりと不安になるようなこと言わないで……」

「三島先生なら大丈夫ですよ」

「無責任に保障しないで……」

「なにかありましたか？ ああ、男の人ですね？」

おキヨさんは生き生きした目でこちらを見ていた。視線を合わせても、ひたりと見返してくる。少しも外そうとしない。嘘を言ったら即座に見抜くぞ、という闘志すら感じた。こうなった彼女を騙し通せたためしはなく、私は早々に白旗を上げた。

「そゆこと。だから、ちよっと落ち込ませてね」

「そもいかないみたいですよ」

目配せに応じて出入口を見ると、見知った男子と目が合った。私のクラスの委員長であるその男子は、その場で軽く会釈してこちらにやってきた。

「どうかしたの？」

腕組みして聞くと、彼はしばらく戸惑ったように視線を彷徨わせた。おキヨさんを意識しているようだ。

おキヨさんは採点を再開して背を向けていた。でもま、彼女のひとだから気付いているだろう。

なんて客観的に観察していたら、委員長が突拍子もないことを言い出した。

「……あの、待っていたのですが」

「は？」

「えと、三島先生が」

「私が？」

軽薄に聞き返した直後、私の頭脳に『しまった』がひらめいた。

どうして、の前に結果だけが弾き出された形だ。後から芋蔓式に理由がずるずると思い出された。

そっぴいえば頼み事してたんだ。すっかり忘れて当人となんてでいただなんて！

「ですから」

「皆まで言っつな新山」

焦りのせいで奇妙な言葉を使っつてしまい、その恥ずかしさもあつて汗がぶわつと噴きだした。おキヨさんがどんな顔をしているかは、見たくなかつた。

「片付けして行くから、先に行つててくれない？」

「はあ」

機敏とは言えない動きで去っていく背中を一瞥して、私は帰り支度を始めた。

おキヨさんの赤ペンがクルつとかシュツて鳴るのを聞きながら、机の引き出しとカバンに荷物を仕分ける。

「三島先生？」

「……なによ」

「そういうことだったんですね」

嬉しそうに納得する彼女に、少しだけむっときた。

私が高校生相手に、そういうゴタゴタを抱えるような女だと思つているのか、と。

しかし真実は別のところにあるのだ。

さつさと誤解を指摘して認識の訂正を求めたいところだったが、そこをぐつと堪えて私はにんまりと笑つてみせた。

おキヨさんはおやつと目を大きくした。私は知っている。この顔は、驚愕にギョツとしているのだ。

私は無言で席を立ち、出入口で立ち止まって振り返つた。

おキヨさんはまだおやつとしていた。

私は、後で見えておれと内心で呟き、

「ごきげんよう」

につこりと笑顔で手を振った。

華やかさからは程遠い商店街の薄汚れた裏道を、私と委員長は角の肉屋で買ったコロッケを食べながら歩いていた。

もちろん私の奢りだ。生徒に買い食いするなど言つてある手前の口封じでもあつたけれど。

委員長はどこか落ち着かない様子で、進行方向と私との間とに視線を行ったり来たりさせていた。

はてなと思つたが、そんなことは二の次だ。頼んでいた事の結果を聞かなくては。

「それで、西川は本気なんだな？」

「はあ、そのようです」

西川というのは私のクラスの男子で、すらつと背の高い、なかなか可愛らしいヤツだ。それがどうやらおキヨさんに惚れているらしく、事の真相を委員長に調べてもらった、というわけだった。

そんなことを調べてどうするのかと委員長は聞いたが、こういうことはやって楽しいから、特に理由はなかった。あえて挙げるなら、おキヨさんを困らせたい、ということくらいか。

もつとも、調べる理由ははつきりとあつた。西川は物覚えがよく、機転が利き、勉学も熱心ではなかったが成績はよかった。その西川が進路希望に就職、もしくは専門学校と書いたのを見て、これはなにかあるのではと思つた。なぜなら、西川にはやりたい仕事も、仕事をしなければならぬ経済的な理由もなかったからだ。それに去年の暮れにした同様のアンケートには、一流私立文系を目指す、と書いていた。これは春休みの間になにか心境を変化させるようなことがあつたのだと考えるしかない。そこで浮上したのが『西川、おキヨさんに恋慕』説だった。経済的に自立した女に似合う男になりたいと思つた浅はかな高校男子には、卒業してすぐに就職するという選択肢しかなかったのだらう。

その説の裏づけはすぐにとれた。しかも、ずいぶんとかわいらしいエピソード付きで。

委員長が聞いた話では、西川がおキヨさんに惚れたのは春休みの最後の週だった。その日、なにをやるでもなくショッピングモールのゲームセンターで遊んでいた西川がトイレに行こうと廊下を歩くと、その途中にあつたベンチにおキヨさんが一人で座っていた。西川は最初、それがおキヨさんだとは気付かなかったという。水色のワンピースを着て、日除けのつばの広い白色の帽子を被り、流れるような黒髪を垂らしておキヨさんは泣いていたそうだ。泣いていた

事情は私も知らない。きつと職場の友達に喋るようなことじゃないんだろう。そこで西川はなにを思ったのか、泣いている彼女の横に座り、何があつたのかを聞いた。彼女はなにも答えずに泣いているばかりだったが、十分か二十分かしてゆっくりと落ち着きを取り戻し、涙を拭いて、ありがとうと言つたのだそうだ。そのとき初めて西川は彼女がおキヨさんだと気付き、彼女がとても可愛らしいことに気付いた。おキヨさんはもう一度、一緒にいてくれたことに礼を言つて去つてしまつたが、西川は後を追えなかつた。それからずっと恋をしているのだという。

「よしよし、そうとなれば多感な十代の若者の彷徨える恋心に決着をつけてあげようじゃない。ねえ？」

「ねえ、と言われましても」

額に汗を浮かべた苦々しい笑顔の委員長に、私はにいつと笑いかけた。

「ちゃんと計画は用意したんだから。あとは新山が協力さえしてくればいいんだよ。してくれるよね、協力？」

「最初から断るとは思つてないつて顔ですね」

「なかなか鋭いね、キミ」

委員長は、嬉しくも悲しくもない複雑な表情を見せた。

委員長と別れた後、私は家に帰つて服を着替え、夜の街に出かけた。

ここ三ヶ月ほど通い詰めた飲み屋に行く。そこは薄暗い雰囲気の良いバーで、細長い通路の側面にカウンターがあり、通路の奥にはボックス席がいくつかあつた。私の指定席は入つてすぐ右の突き当たりのカウンター席で、壁に寄りかかりながらバーテンダーお勧めのカクテルを飲むのが好きだった。そのバーテンダーはだいたいに於いて面白く明るく話の上手な男だったが、ただ一点においては頑固だった。彼はバーテンと呼ばれることが大嫌いだった。バーテン

とバーテンダーには大きな意味の違いがあるのだという。私が初めてこの店に入った時に、彼は見知らぬ客とすることで怒鳴りあいすらしていた。それが幸いして私が彼の逆鱗に触れる機会は訪れることは無かったのだが、何も事情を知らなかった私はひどく興奮して怯えてしまった。

半分ほど恐慌状態にあつた私を宥めて心を捕らえてしまったのが、あの人だった。

時計を見ると、まだ七時前。熱心な部活動員とその顧問なら、やっと今日の練習を終えたころだろう。私はダメでいい加減な教師だ。二杯目のモスコミュールを頼み、私は隣りの席に目を落とした。

あの人はその席に座り、私の話に耳を傾け、うんうんと頷き、間違っていたらストレートに、だけど私を傷つけないように訂正してくれ、私に優しい笑顔で話しをしてくれ、慰め、励まし、それでいて甘やかせ過ぎない、ほぼ理想的な男性だった。

たった一点の欠点が、彼を理想的な男性から最低のゲスと呼ばれる存在に貶めた。

実際、彼はゲスだった。

私の耳元で甘い言葉を囁き、丁寧に心と体を解きほぐし、何度も私の体を求め、ついには私からも求めさせた彼には、妻子がいた。そこに愛はない、愛しているのは私だけだと彼はいうが、家庭を持っている男が妻以外の女性と関係を持つていいはずがなかった。私は罪悪感に打ちひしがれ、別れようと思った。けれど、顔をあわせるだけで、声を聞くだけで、その思いはどこかに行ってしまうのだった。私は虜だった。私の前では誠実そのものである彼が、家族に対して背德的で不誠実なことをしているのだとわかっていても、彼を拒むことは出来なかった。むしろ、私は嬉々として彼を受け入れた。背德的な行為には、麻薬のような甘さがあった。

二杯目に口をつけてすぐに入り口の開閉を報せるベルが鳴り、あの人が隣りにやってきた。

穏やかな顔をした、どこにでもいる三十八歳のサラリーマン。ち

よつとくたびれたスーツと、妻帯者特有の趣味の悪い組み合わせのネクタイとシャツに身を包み、かすかに甘いコロンの匂いを纏っていた。私はこの甘い匂いがダメだった。嫌いというわけじゃなく、頭がくらくらした。最初に出会った夜に、ほとんど勢いだけで関係を保持ってしまったあの夜に、私の脳はこの匂いと性的興奮を強く結び付けてしまっていた。

「やあ」

なんでもない気軽な挨拶に、私も「ハロー」と笑顔で答えた。

「今夜も来ているとは思わなかったよ」

彼の言葉には氣遣うような響きがあった。それには昨夜のことが関係していた。私は昨夜もこのバーに来ていた。昨夜は彼のほうが先に来ていて、軽く食事とアルコールを摂った後にホテルに行った。そこで私はアレが始まってしまい、私達はことに及ぶことが出来なかったのだ。彼は私のアレが非常に重いことを知っていて、私の体を氣遣っているのだった。

と同時に、言葉どおりに驚いてもいるようだった。ここに来るということは、私達の間では「したい」というサインだったからだ。なぜこういうことになったかと言えば、単純に二人の関係上、こうするしかなかったからだ。

私が、彼が妻帯者だと知ったのは三度目に抱き合った後で、彼の口から聞かされた。最初の日は、酒を飲んだ上でのよくある話の一つに過ぎないと考えていたから名前もよく覚えていなかった。二回目は偶然同じバーで出会い、互いに残っていた余韻が再燃したようなものだった。だから二回とも、連絡先の交換だとかはしなかった。私はそれはそれでいいと思っていたし、彼との一時は幸せだったのだ、そのまま思い出にしておもうと思っていた。なのに三度目に会ったときに、彼は私と真剣に付き合いたいと言ってきた。体から始まった関係かも知れないが、この思いは本気だと。だから私は、遊びでは済まされない三度目の関係を持った。三回というのは、私にとってはボーダーだったのだ。なのに彼は私を散々可愛がった後

に、余韻にひたって夢心地の私に対して、自分には妻と高校生になる娘がいると言ったのだ。ひどい裏切りにぼろぼろになった私は彼の制止も聞かずに家に帰った。その時には既に、彼に携帯の番号を書いたメモを渡してしまっていた。

しばらくして、携帯に電話がかかり、もう一度会いたいという彼の誘いを断ることが出来なかった。

それから、どうしても会いたいとき以外は連絡をせずに、この店で相手を待つというルールを決めた。

彼が幾夜も私を待つこともあれば、私が虚しく一人の夜を過ごすこともあった。

けれども、私も、おそらく彼も、そのゲームのようなルールに不満はなかった。

「私だつてそう。だから、今夜はただ飲みに来ただけなの」

「そうか。俺もそのつもりで来たんだよ」

彼の年齢に不相応な落ち着きと、どこまでも優しい顔つきに私はうつとりと微笑んだ。

今夜は久しぶりにとことん話し合った。私はおキヨさんと西川の話をして彼を和ませ、彼は手がけていたプロジェクトが成功に終わったことを誇らしげに語った。

帰り際、清算を終えて店を出てすぐに彼が私を抱き締めてきた。

店の入り口は通りから少し奥まったところにあつて、そこは細い通路になつていたので人目があまりなかった。

「どうしたのよ？」

「君が愛おしいんだ、栞。たまらなく愛おしくてどうしようもなくなる時がある」

強く強く抱き締められ、私の髪に顔を埋めた彼に、彼に漂うあの甘い匂いに、私は意識がとろけていった。私からも彼を抱き締め、背中を擦り、頭を撫でてあげた。ほんの少しだけ寂しがり屋な彼のこんなところに、私はいつも胸を締め付けられた。

やがて、私はそつと解放された。

柔の決断（後編）

週末がやってきた。

今日はよく晴れた日で、絶好の謀略日和だと言えた。西川とおキヨさんを罠にかけるのだ。

計画はこうだ。

たまの休みの第三土曜日に私がおキヨさんを誘ってショッピングに出かけ、没頭癖のあるおキヨさんとうっかりはぐれてしまう。そこにタイミングよく委員長とはぐれた西川が現れる。西川が思い切った行動をとるように、あらかじめ委員長が西川を焚きつけておく。二人きりになった西川は、なんらかの決断をするだろうし、西川が告白するなら、今度はおキヨさんが決めてくれる。どちらにしろ、西川の気持ちや宙ぶらりんのままでいることはなくなるだろうし、大学への進学を再検討してくれるだろう。

多少のトラブルはあったが、計画は概ね順調に遂行された。

明日の食費にも困るのではないかというほどの、新米教師にしては不当な出費をしたおキヨさんは、満足そうな笑顔で大量の荷物を抱えていた。途中、重そうにしている彼女に、どうせなら家に送り届けてもらえばよかったのに、と言ったら、そんなこともできましたね、と恥ずかしそうに笑った。こんな時、おキヨさんは同性の私から見てもとても可愛らしかった。いつも楚々として、他人を寄せ付けないような雰囲気を持っていたが、それは彼女の内面そのものではなかった。彼女はどちらかといえば社交的だったし、気後れすることもほとんどなかった。感性が微妙にずれていることすらもチャームポイントだと言えた。

私がどこでおキヨさんとはぐれようかと考えながら、ショッピングモール内をうろろしていたら、おキヨさんが「ゲームしません？」と言い出した。私はその提案にすぐに乗った。ゲームセンターなんて、はぐれるにはおあつらえ向きだった。

ゲームセンターに着くや否やおキヨさんは真っ直ぐに一つの筐体に向かった。それは対戦ができるゲームで、私達が子供だったころのさらに前に入っていたアニメのロボットを操縦して敵ロボットを倒すというものだった。

「私、このアニメ好きだったんですよ」

そう言っただけ微笑を浮かべたおキヨさんはコインを投入した。

「三島先生もします？　これ、共闘できるんですよ。それとも対戦します？」

「じゃ、対戦」

私はゲームなんて一年に数えるほどしなかったけれど、そのアニメのことは知っていて、好きなキャラ専用のロボットがあったのでそれを使ってみたいと思った。なんとなく童心に返ったような気がした。子供の頃は、女の子よりも男の子とよく遊んだものだった。私が操る赤い機体は、五分もしないうちにおキヨさんの駆る連邦の白いあんちくしょうに沈められてしまった。少しくらい手加減してくれてもいいようなものの、ゲームをしているときのおキヨさんには、そういった分別はないようだった。

「ずいぶん上手いんだね」

「一生懸命練習したんですよ」

早くも一人用のステージが始まっていて、私には目もくれずにおキヨさんは言った。

この分だと、いつ離れても気付かれることはないだろう。

私は静かにおキヨさんから離れて、例のベンチのところにまで行って携帯を取り出した。委員長をコール。二度呼び出し音が鳴り、三度目が鳴る前に委員長が出た。

私は現状を説明して、うまく西川を誘導するように伝えた。誘導し終わったら私と合流するようにとも言っておいた。

二十分ほどして委員長がやってきた。

私はお茶のペットボトルから口を離して、にっと笑った。

「どうだった？」

「最後まで見てきたわけじゃないですけど、普通に話してましたよ」
「そうかそうか、ごくろうさま。この後時間大丈夫？　なんか食べに行こっか？」

「俺、あんまり金ありませんよ」

委員長が生真面目な顔で言うので、私は腹立たしいやら可笑しいやら、とにかく楽しい気分になった。

「バカね。私の奢りに決まってるじゃない」

私がそう言うと、とたんに委員長は安堵の色を見せた。

「どこに連れて行ってくれるんですか？」

「どこでもいいわよ。あ、でも、あまり高いところはダメ。それから、アルコールが出るとかもダメよ。どこか行きたいところある？」

委員長はしばらく考え込んで、少し顔をしかめた。

「美味しいピザの店があるんですけど、そこ、ワイン置いてるんですよ。ダメですよね」

「へー、別に飲み屋ってわけじゃないんでしょう？　今時ビールも置いてないファミレスもないし、いいよ、そこで」

「本当ですか？」

委員長は驚きながらも、にんまりと笑った。なにか楽しくてしょうがない企みのある子供みだった。

「ビックリしますよ」

委員長の言ったとおりには私はビックリした。

まず、店のある場所にビックリした。そこは商社が並ぶビル街の一角、保険会社のビルの地下にあった。

次は店員だ。出迎えてくれたのは普通のバイトの女の子だったが、厨房にいる二人の中年男性はイタリア系の顔をしていた。その二人が陽気に歌う異国の歌が流れ、店内は地下だと言うのに太陽の下にいるような明るさだった。

そして料理の美味しさだ。多少は日本人向けに手直しされている

だろう味付けは絶妙で、委員長の前じゃなければお勧めワインを頼んで、たつぷりと堪能したいところだった。いや、本当は、頼もうかどうしようか迷うところまできていた。

ふと、なぜ委員長がこんな店を知っているのかが気になった。ここは委員長の家からも、学校からも遠い場所にあつて、しかも高校生が立ち寄るような街ではなかった。

「ねえ新山」

委員長は口一杯にピザを頬張っていて、もぐもぐしながら何事かと視線で訴えた。

「この店、どうやって知ったの？ 雑誌にでも載ってた？」

「……伯父が教えてくれたんです。いつか彼女ができたら連れて行けて」

「ふーん。彼女、ねえ？」

私が意味ありげに見える笑顔を見ると委員長は真っ赤になつて首を振った。

「違いますよ。先生には、美味しいピザ屋を教えたかっただけで、そつという意味ってわけじゃ」

半分ほどむきになつて言う委員長に、私は笑いが堪えられなかった。ああ、ほんとに高校生はまだまだ子供で可愛いなあ。

「わかつてる。わかつてるよ。新山にはちゃんとして付き合ってる彼女がいるんだもんね？ 私、知っているんだからね」

「あんまりからかわないでくださいよ」

委員長はぷりぷりしながらピザにかぶり付いた。

それから私は食べ終わるまでずっと黙っていた。ピザが冷めては勿体無かったし、ワインの誘惑に負ける前にお腹を一杯にしておうと思ったのだ。委員長は少しだけ居心地悪そうにしていたが、手と口を休めようとはしなかった。

味にも量にもお勘定にも満足した私は意気揚揚と店を出ようとした。

そこで最大のビックリがあつた。

地上に上がる階段に、あの人が立っていた。露骨に驚いた表情を浮かべて、視線を泳がせていた。

その後ろには険しい顔の美人と、背の低い女の子がいた。

その女の子が驚いた顔をして言った。

「あれ？ トモにい」

「よおっ」

私の背後で委員長の声がした。

私は半分ほどパニックになっていた。私はその女の子を知っていた。委員長長の従妹で、私の学校の一年生で、榊山あやめといった。あの人はマスマタケシ。ということは委員長の伯父さんはあの人で、あの険しい顔をした美人はあの人のお奥さんで、私の恋敵なのだろうか。それにしても、どうして今まで気付かなかったのだろう。あの人のお嬢は高校生で、委員長の従妹はあの人と同じ名字だったというのに。

あやめが私に気付いたのか、不思議そうにしていた顔を訝しげなものに変えた。

「三島先生？」

「こんばんわ、榊山さん」

私はなるべく自然に声を出そうとした。けれどそれは失敗した。どうしても声が震えてしまったのだ。だけど、黙るわけにはいかなかった。沈黙は私の立場を悪くするとは思えなかった。

「新山君には手伝ってもらったことがあって、そのお礼に夕飯をご馳走したところなのよ」

あやめは私の顔と私の背後に目を何度か往復させて、にっこりと笑った。その笑顔は授業で何度か見たことがあった。この子は、なにかわからない時や困った時は、こうやって笑うのだった。

「……そちらはご両親？」

笑顔のままで「うん」と頷くあやめは健気だったが、私は彼女の健気さがどこから来たものかに思いを馳せる余裕がなかった。

私は、笑おうとしても失敗するのが目に見えていたので、真摯な

顔で階上を見上げた。

「初めまして、あやめさんのクラスで数学を教えている三島栞です」
私が自己紹介すると険しい顔の美人はぱつと表情を変えて笑みを見せた。保護者が先生に見せるよくある反応だったが、彼女の笑みには一瞬空気が華やいどのような気がした。素顔と笑顔では印象が全く違った。

「初めまして先生。あやめの母です。この子、学校でうまくやっていますか？　いつもぼーっとしていませんか？　勉強もあまりできないし、この前の入学テストも酷かったし、数学なんて特に、あんまりいい点数がとれていなかったんですよ」

私は教師になってまだ二年と少しだがこういう母親は多く、どうやって対処すればいいかも心得ていた。あの人の妻だとかそういうことよりも、あやめの母親だという思いが強くなって、ずいぶんと冷静にさせられた。

「まだ高校に入っただばかりですね。私は担任ではないのでクラスの様子はわかりませんが、何人か友達もできたようだし、心配なさるようなことはありませんよ。授業も熱心に聞いてくれますし、ちゃんと理解もしています。今度の中間試験では、ちゃんと結果を出してくれますよ。ね、榊山さん？」

あやめは自分がそんなに褒められると思っていなかったのか、また自分に話が振られるとは思っていなかったのか、顔を真っ赤にさせて目を大きく開いていた。ついこの間まで中学生だったとはいえ、あやめは他の生徒よりも明らかに幼かった。それだけ可愛らしく、素直で、いい生徒でもあったのだけけれど。

「あ、あの……がんばります！」

緊張気味に言うあやめに、私は思わず頬がほころんでしまった。

あやめの母親は上機嫌にあやめを褒め、私に「これからもよろしくお願いします」と頭を下げた。

それから当り障りのない挨拶を交わして、私達はお別れをした。

委員長も、絵に描いたような親戚の子の挨拶をしてから私についできた。あやめがはにかんだような笑顔で「バイバイ」と手を振るのに「じゃあな」と返事した後、少しだけ後ろ髪引かれるような顔をしていたので、私は「榊山さんと一緒にいればよかったのに」と言った。すると委員長はものすごく不機嫌な顔になって「先生を一人で帰すなんてできません」と答えた。

まだ宵の口といえるくらいの時間だったが、委員長がいうように女性が一人歩きするにはこの町は治安がよくない。私には武道の心得が多少はあったし、非武装の素人相手なら逃げ切る自信はあったけれど、ナンパの類を追い払うのにはまた別の苦労が必要だった。

だから委員長の気遣いはとてもありがたく、そんな気遣いができる委員長に好感を覚えた。彼は、私が有段者だと知っていて、それでも一緒にいてくれることを選んでくれたのだ。

「ありがとうね」

「いえ。当然のことですから」

こういうことを当然のことだと考える子がまだいるのだと思うと、私はとても嬉しくなった。

私達はなにを話すでもなく駅までの十分間を並んで歩いた。

委員長は普段から口数が多いほうではなかったからだが、私は考え事をしていたからだった。

あの店の出入口で鉢合わせした時のことを考えていた。あの人はずっとどこちなく緊張していた。私があやめと奥さんと和やかに会話をした後も、まだ顔を強張らせたままだった。考えてみれば、あの人は一言も話さなかった。先生と生徒の親が話をする場合、母親がいれば父親はあまり口を挟まないものだったけれど、あの人は家族とも話をしなかった。委員長ともだ。ほんの短い時間だったからかも知れないが、私にはなにかそこに重大な問題があるように思えてしかたなかった。あの家族はあまり上手くいっていないのではないだろうか。ともすればその原因は私にあるのではないだろうか。

そう思つて、とても後ろ暗い気持ちになつた。

ふと隣りを見ると、私の気分が伝染したのか、いやそんなはずはないのだが、委員長もどこか深刻な顔をしていた。

「どうしたの？」

「え？」

委員長は体をビクツと震わせて私を振り返つた。私を映す瞳には驚愕があり、まるで私がいたことに今気付いたかのような顔だつた。

「なにか悩み事があるんじゃないの？ すつごく深刻そうな顔してたよ」

「そうでしたか？」

何でもない風を装つてから、委員長は顔をしかめた。躊躇するうちに何度か口を開けたり閉めたりした後、憂いのある表情になつた。その時私達は高架橋の下を通つたところで、丁度電車がやつてきて車窓から洩れた明りに照らされた。ものすごい早さで明るくなつたり暗くなつたりする中、私の動悸が跳ね上がった。委員長の表情には苦悩と諦観があつた。まだ十七歳の少年がするような顔ではなかつた。そのような顔をさせるなにが委員長の身にあつたのだろうか。私にしてあげられることはないだろうか。

胸が締め付けられ、衝動的に抱き締めてしまひそうになるのを私は我慢しなければならなかつた。後になって思い起こせば、私自身が人肌恋しかつただけだつたのだが。

「……こんなこと、先生に言うようなことじゃないんですけど」

「なあに？」

「あやめの家、今問題抱えてて。伯父さんと伯母さんの仲がこじれてて。あいつ、傷ついてるのを隠そうとしてるんです」

委員長は少し考えて、それから息を大きく吸つて吐いた。溜め息というよりは、気分を変えるための深呼吸のようだつた。

「俺にとってあやめは妹みたいなもんなんです。だから、その、余計にうまく接してやれなくて。これが友達とかならもつと上手くやれるんですけど。だから、どうしたらいいのかわからないんです」

「難しいわね」

私は考え込んだ。委員長にとって深刻な問題であると同時に、私にとってもそれは深く関わりのある問題だった。あの夫婦の仲がこじれているのは、きっと私のせいだ。元々、亀裂はあったのかも知れない。けれどそれを決定的にしたのは、たぶん私だ。

一見、この問題は委員長にとってはそれほど難しくないように思えた。けれど、委員長の人間関係を想い描けば、それは複雑に絡まっていた。先ほどのやりとりを見ていた限り、委員長とあの両親とはそれほど親密には見えなかった。親戚ゆえのぎこちなさといえればいいのだろうか、よそよそしさが感じられた。ただ、あやめとはずいぶんと親しいようだ。それに委員長が気付いているかどうかかわからないが、あやめはどうやら委員長に心を寄せているみたいだった。委員長には同じ学年の彼女がいて、気付いていたとしてもその気持ちに応えられはしないだろうけど。しかし、委員長のあやめに対する気持ちは、必ずしも委員長が言っていたとおりだとは思えなかった。ほとんど勘だが、私には委員長があやめに妹として以上の感情を持っているように見えた。それが話をややこしくしているのだと私は睨んだ。

打開策が見出せないまま、私達は駅に着いた。この駅からだと、私達はそれぞれ逆方向の電車に乗ることになる。委員長が最後まで送っていくつもりではないかと思い、私は感謝の笑顔を浮かべて口を開いた。

「今夜はありがとうね。新山は上りに乗るんだよね。私は下りだから」

思っていたとおり委員長は当惑を見せたが、結局はここで別れるほうを選んだ。

はあ、という溜め息のような返事に、私はますます笑みを強めた。「ほらほら、元気だしなさいって。榊山さんには、新山が思ってること、正直に言うしかないと思うよ。あの子が傷ついていることに気付いてることとか、心配してることとかでいいんだって。それだけ

でも彼女、すごく楽になると思うよ」

委員長は少し考えて、静かに笑った。穏やかで、優しい笑顔だった。私の鼓動が、また早鐘を打ち始めた。あわてて切符の販売機に小銭を入れて、気分を紛らわせようとした。

「そうですね。それくらいしか、俺がしてやれることなんてないですよ」

委員長も隣りの販売機に小銭を入れてボタンを押した。

「あ、もう電車来るから、私行くね。お休み」

私は出てきた切符を握り締めてホームへと駆け出した。電車が来るまでにはまだ時間があつたが、ともかく委員長のそばにこれ以上いたら自分がなにをするかわからなかったので逃げたのだ。幸い、上りと下りのホームは違ったので、委員長が追いかけてくるようなこともなかった。

ホームに立つと、線路を挟んだ向こうに委員長がいた。

「先生！今日は色々、ありがとうございました！」

委員長の大声が響いた直後に上りの電車が来て、委員長の姿は見えなくなった。

委員長からも、私は見えていないはずだ。

私はほっと息をついた。私は年甲斐もなく顔を赤らめていた。頬が熱く、ゆっくりと呼吸をすることができなくなっていた。

私はすっかり委員長に心惑わされてしまっていた。委員長はあの人に似ていた。容姿に似通ったところはないが、その雰囲気似ていた。実際にはぜんぜん違うのかも知れない。けれど、そう思っておかないと、私は冷静ではいられなかった。

一分ほどしてようやく来た電車に乗り込み、横向きの座席の出入口すぐのところに座った。手摺りにしな垂れかかり、私はゆっくりと息を吐いた。

私はいったい何を考えているんだ。生徒に男を感じてしまうなんて、自分がわからない。

もしかして、ヨッキュウフマン？アレのせいでしなかったから

？ ああ、アレのせいで精神が不安定になってるのかも。きつとそうだ。うん、そうに違いない。

私は即急に答えを求めて、この事は思い出さないことにした。深く考えれば考えるほどに、深みにはまっていきそうな予感がしたからだった。私の予感によく当たるのだ。

月曜の放課後、終礼が終わって職員室に行くと、おキヨさんが帰り支度をしていた。いつもは私と飲むコーヒーか紅茶かお茶を用意してしてくれるのにどうしたのだろう。

「あ、三島先生、お疲れ様です」

屈託の無い笑顔のおキヨさんに私も笑顔で……屈託の無い笑顔？ おキヨさんはいつも楚々とたおやかに微笑むのに、どうしたことだろう。

私が笑顔を固まらせたのを不思議に思ったのか、おキヨさんが目をわずかに大きくした。

「どうかしました？」

「あ、ううん。別に……おキヨさんこそ、なんだか嬉しそうじゃない。どうしたの？」

聞くと、おキヨさんはぽつと頬を赤らめて俯いた。わかりやすい反応だ。私は思わず口許をにやけさせてしまった。

「ふーん、そーいうことかー」

「そういうことってどういうことですか」

「どういうことだと思う？」

私の問い返しにおキヨさんはポカンと口を開けて、それからむすつと不機嫌な顔になった。

「三島先生の意地悪っ」

そしてころつと表情を変えて、またにっこりと笑った。

「そんな人にはヒミツです」

パタンとバッグを閉じ、おキヨさんは早足で去っていった。

広い部屋に一人になって、私はほつと息を吐いた。

どうやらおキヨさんと西川はうまくいったようだ。今日、西川が妙に熱心に授業を聞いていたからおかしいとは思っていた。それだけではどうなったのかまでは判断しかねたけれど、今のおキヨさんの態度ではつきりした。

もう一度、溜息を吐いた。今度のは、安堵のものではなく、心配によるものだ。

二人が付き合うのはめでたいことだったけれど、立場が悪すぎる。教師と生徒だ。発覚すればおキヨさんの今後の人生に差し障りがあるのは確実だ。西川がそういうことまで考えているかは甚だ疑問だったし、それはおキヨさんも同様だった。なにもかもうまくいけばいいけど。

私はさらに溜息を重ねた。

より破滅的な立場にいるのは私のほうじゃないか。
バカみたい。

スーパーに寄ってスパゲティ用のミートソースを買って帰った。

私は自分が食べるためだけに料理をするのが好きではなかったから、さして手間のかからないものを食べることが多かった。

家に帰り、すぐにシャワーを浴びた。気分が鬱々としている時はシャワーを浴びるのが一番だった。一日に何度も浴びることすらあった。酷い時なんて半日ほどシャワーを浴び続けて風邪をひいたこともある。

浴室から出て、バスタオルで適当に体を拭いた。頭にタオルを巻いて、下着をつける。下着姿で台所に行き、二つの鍋に水を張って火にかけた。ミートソースを温めると、スパゲティを茹でるのが二つだ。

台所に置いている小さな椅子に腰掛けて、ゆらゆらと揺れるガスの炎を眺めた。

ゆらゆら、ゆらゆら。定まらずに、ちょっとした揺らぎに流される。まるで私みたいだ。

土曜の夜から今日まで、あの人から連絡がなかった。このまま連絡がなければ、自然消滅だ。私から電話をかける気にはなれなかった。あのバーで待つもの嫌だ。本当ははつきりさせて、すっきりしたかったが、自分から問うことはできそうにない。ゆらゆら、ゆらゆらと、同じところただ揺れていた。

突然、携帯が鳴った。電話がくるのはいつも不意のことだけれど、今回は心臓が鼓動を忘れるほど驚いた。

恐る恐る携帯の液晶を見ると、あの人からだった。

数秒ほど躊躇して、私は通話モードにした。

「はい」

「栞？」

あの方は疲れた声をしていた。電話の向こうから車の行き交う音が聞こえた。仕事帰りだろうか。

「うん……なあに？」

「今夜、会えないか？」

「あつて、どうするの？」

「……会いたいんだ」

「だから、会ってどうするのよ。一緒にお酒飲むの？ 話するの？ 私を抱きたいの？」

自分の喋っていることがコントロールできなくなっていた。もともと、考えながら話をするのは苦手だ。

「そうじゃない」

「そうじゃないってどういうことよ。わけがわからないこと言わないで！」

私の中に沈んで積み重なって堆くなっていた諸々の感情が溢れ出てきた。腹立たしいやら悲しいやら、一言では表せない気持ちにボロボロと涙がこぼれてきた。

「ただ会いたいんだ。あのバーで待っている。閉店まで待っている

から」

そして一方的に通話が途切れた。

ツーと無意味な電子音を聞きながら、私は涙を拭った。拭っても拭っても溢れてきたが、それでも何度も何度も手のひらを押し付けた。

十分か二十分、正確な時間はわからないが、ともかくずいぶん経ってから泣き止むことができた。

心にぽっかりと穴があいて、ひどく空虚な気分だった。

鍋の水はすっかり沸騰していた。気泡が生まれて弾けるグツグツという音が聞こえた。

私はガスを止め、頭に巻いていたタオルを外した。服を選び、簡単に化粧をした。

あの人に会いに行くことにしたのだ。

何が正しいかを判断するのは、もうずいぶんと億劫になっていた。会いに行けばどうなるかはわかっていた。泥沼だ。

けれど、それがどうしたというのだろう。

私は、私のしたいことを素直に感じられるようになっていた。自らの望むことに対して、何が正しいかなどどれほどのものだというのだろうか。

外は雨だった。

傘を広げながら真っ暗な空を眺めたら、なぜか顔がほころんだ。

決して気分がいいわけでも、面白いことを思いついたわけでもないのに、顔が勝手に笑顔を作ったのだ。

自分の事ながら不思議なこともあるものだと、意識的に苦笑した。

私が家に帰ったのは、火曜の朝だった。

水ようかんの気持ち

私はグリーンの蛍光ペンを握って、うんうんとうなっていた。

目の前には会議机に広げた地域美観マップがある。

ここ北一高校を中心とした近隣地図の拡大コピーに、ゴミや落書きなどの清潔度について状況ごとに色分けをするものだ。ピンクが要警告、オレンジが要注意、グリーンが安心を表している。清掃活動での所感をまとめて一ヶ月ごとに作成し、私の部活動記録になる。

安心段階の判断条件は、地域住民の自主活動によって清潔度が保たれていること、なのだけれど、その判別がなかなか悩ましい。積極的に自主活動をしている地域はグリーンにしたいくなるのだが、汚れるスピードに追いついていないと、どうしてもオレンジにしなくてはならなかったりするからだ。逆のパターンもあって、本当に悩ましい。

ここは三階建の文化部棟の一室で、私が所属する生徒会執行部地域課の部室だ。正確には違うけど、他に的確な表現がないので誰もが部室と呼んでいる。元々はボランティア部が使用していたのだけど、去年の夏前に部活ごと生徒会に編入されてしまった。もう一年になるだろうか。

元ボランティア部の過半数は、生徒会の方針に反発して新たに団体を作って活動している。もともと、過半数とはいえ三人しかいないから同好会しか作れなかったようで、部室も与えられずに今ではどこでなにをしているのかよく知らない。この春までは地域課の常任担当が私を含めた編入組二人だけだったので、この部屋を使っているのが後ろめたくもあったのだけど、そんな気持ちも新入生が何人か入ってきたら薄れてしまった。

その新入生たちは今は散策に出かけていて、部屋には私と、もう一人の編入組である友則さんがいるだけだった。

彼も同じ会議机に向かって私と並んで座り、同じように地図のコ

ピーに色塗りをしていた。そちらは地域安全マップ。ここ数年の犯罪事件と町の様相から、立入り禁止、一人歩き禁止、要注意、安心という区分で塗り分けている。残念なことに、この地域の治安はあまり良くないらしい。私のように普通に生活している分には、なにも危険を感じるようなことはない。けれど彼の手元にある地図は、そこかしこが立入り禁止を示す赤で塗られていた。繁華街の路地裏や、再開発地区の辺りに多いようだ。

しばらく眺めていたら、彼が手を止めて顔を上げた。ちらりと私の顔を見た後、大きくのびを言った。

「少し休憩にするか」

「あ、いいですね。お茶にしましょうよ。私、お茶うけ持ってきたんですよ」

私は鞆から二つきりの水ようかんを取り出して見せた。ビニールパックされた一口大のものだ。

「二つだけか？」

「二つだけです」

「おまえなあ」

彼は怒ったような困ったような顔をした。

「いいじゃないですか。一年が帰ってくる前に食べちゃいましょうよ。ゴミは私が持ち帰りますから、バレませんって」

友則さんはまじめだなあと思いつつ、悪戯っ子のように歯を見せて笑う。すると、彼も頬を緩ませた。それは私のは違い、どこか悲しそうな笑顔だ。

「じゃあ、お湯汲んでくるから、準備しておいてくれ」

「わかりました」

サイドボードからポットを持って部屋を出て行く背中を見送り、私もきゅーすと湯のみを出して机に並べた。さらに引出しから茶葉の袋を取り出す。このお茶は生徒会長がどこだかに行った時のおみやげで、袋には高級番茶とプリントされていた。番茶なのに高級とは、私はいつもクスリとしてしまう。

「おまえ、よくそれ飽きないな」

声に振り向くと、いつの間にか戻っていた彼が呆れ顔をしていた。
「だって、高級番茶ですよ？ 瓶詰めなのにドラフトビールくらい面白いじゃないですか」

彼はポットから湯のみにお湯を注いで、

「その例えはよくわからん。俺が言いたいののは、もう何週間も前から同じものでよく笑えるなってことでだな」

湯のみからきゅうすに移し、

「わかってますよ。でも、面白いものは面白いじゃないですか」
きゅうすから湯のみに戻し、

「おまえの人生はゆたかだな。ほれ」

差し出してきた手に、私は茶葉の袋をポンと渡した。

彼は手際よくきゅうすに茶葉を入れて、ゆのみからお湯を移し戻す。いつ見ても、ほれぼれするほど迷いのない手際の良さだ。私も家で手伝いとかはするのでお茶の煎れ方は知っているけれど、友則さんのようにはできない。ちよつと、もたついてしまう。

「先輩はいい主夫になれますね」

「そうかもな」

彼は、じつときゅうすを見ている。

「冗談ですよ」

「わかってるよ」

ちつとも振り向かない。

でも、楽しい。

友則さんは三年生。私は二年生。部活の先輩と後輩だから、必然的に同じ場所にいる。それだけの関係。だからこそ、気兼ねも気負いもなく話ができるのだと思う。

前に部室に遊びに来た友達が、友則さんをどう思っているのかを聞いてきたことがあったけど、私が彼に気があるように見えたのだろうか。そうだとしたら思ってもみないことだ。

それに、恋愛なんてめんどくさいばかりでちつとも楽しくない

から、私は今の関係がお気に入りなのだ。

もつとも、彼には交際している人が今はいて、この関係がこれ以上発展する余地はなかった。まあ、もともと友則さんは私のタイプじゃないので、ちつとも痛くない。かゆくはあったけど。

「も、いいかな」

湯のみにお茶が注がれて、部屋にいい香りが広がった。うん、やっぱり友則さんはお茶を煎れるのが上手だ。

私は自分の湯のみを持って座っていたところに置き、

「どうぞ」

水ようかんを一つ取って彼の前に置いた。

「ありがと」

「どういたしまして」

笑顔を交わして椅子に戻り、お茶を一口すすった。体が温まるなあ。汗かいてきちゃった。

「先輩。暑いですね」

「そうか？」

そう言って湯のみに口をつけた彼に、私は顔がにやけてしまった。

「いえ、部屋がです」

「もう夏だからな。窓開けるか？」

「開けなくていいですよ。虫が入って来るじゃないですか」

部室棟の横は林になっていて、梅雨時期から秋口まで色んな虫がわんさとわく。今も窓の外には、やぶ蚊みたいなのが飛んでいた。

私は虫が嫌いなので、部屋に虫が入ってくるくらいなら、まだ汗だくになるのを我慢するほうがマシだった。

「それもそうだな。暑いなら、無理に飲まなくていいぞ」

「嫌ですよ」

私は水ようかんのパックを引き裂いて、ちよつとだけかじった。

うん、甘くておいしい！

「そおか」

彼もパックを開けると、一口で食べてしまった。

「おいしかったですか？」

聞くと、彼はしばらく口をもごもごさせていた。あ、まだ口に持っていたんだ。

「……おいしかったよ」

そう言つて、友則さんはいつもの笑みを浮かべた。

この時、見慣れているはずのその表情に私はなぜだかひっかかりを覚えた。そして、出会ってから十五ヶ月も聞かずにいた疑問を口にしていた。

「先輩は、どうしていつもそんな顔をするんですか？」

「そなたで、どんなだ？」

意外そうに目を開いて、彼は少しだけ身を乗り出してきた。

私は反対に、ちよつとだけ肩を遠ざけた。ただ、なんとなく。

「えと、なんか、笑顔が悲しそうですよ」

「意識したことはなかったな。そう見えるのか」

「はい、そう見えます」

友則さんは姿勢を戻して、お茶を一口すすった。そして正面の窓に顔を向けたままで、ぼつりと漏らした。

「そう言えば正美も、いつもしょーもない顔してるとかつて言つたな」

彼女なら言いそうだな。きっと、デートの時にでも言われたのだろう。一緒にいるのがそんなにつまらないのかーって意味で。

「正美先輩は前ほど来ませんけど、喧嘩でもしたんですか？」

「いいや？ あいつは今ごろ家で勉強中だ。進学する気になったのはよかったが、学力が足りてないことにやつと気づいたらしい」

「なんだか他人事ですな。ちよつと冷たくないですか？」

「そうか？」

「そうですよ。もつと親身になつてあげなくちゃダメですよ。恋人なんだから」

彼の表情が曇った。眉根を寄せて、なんだか複雑そうな顔をしている。なにかマズイこと言つたかな。

「聖谷」

苗字を呼ばれて、私はちよつと姿勢を正した。

「はい」

「恋人に勉強についてあれこれ言われて、おまえならうれしいか？」
うーん。自分の身に置き換えて考えようとしたけど、想像がつかない。

「どうでしょうね」

「おまえなあ……田中だっけ？ あいつがそんなこと言うてきたらどう感じる？」

今度は私が顔を曇らせる番だった。

「先輩、知らなかったでしたっけ？ 私、あいつと別れたんですよ」
私の体に、嫌な感触が甦ってきた。あの時、あいつに掴まれた肩。耳をざわざわさせた息づかい。体を這いまわった指。あいつの目……拒絶した私を蔑むように見ていた。

まだダメなんだ。もう何週間も経ったのに。ぜんぜん平気にならない。気持ちが悪い。

私が持つ湯のみがカタカタと音を立てた。机に当たっていた。私、震えている。

「おまえ……」

友則さんの声が優しくなった。氣遣つてくれている。でも、そんなのは嫌だ。

私は努めて明るい声を出した。

「ちよつとしたケンカのはずだったんですけどね……フっちゃんいました。まったく、嫌になっちゃいますよね」

ほんと、嫌になる。あいつのこと、あんなに好きだったのに。一緒にいるだけで、すごく楽しくて、手が触れただけでドキドキしていたのに。

なんで私は、あいつを受け入れられなかったのだろう。

どうして私は、あいつをこんなにも嫌悪できるのだろう。

そして、私は、こんな話をして、友則さんにどうして欲しいのだ

ろ。自分がわからない。

でも、止められない。

「男子って、彼女とすることしか考えてないんですか？ 先輩もおんなじですか？」

きつと私、彼を睨んでいる。顔から力が抜けない。

友則さんは静かな顔で、じつと私の目を見てきた。

「俺は……違うよ。そりゃあ、好きな女の子とそういうことをしたいと思うことはある。でも、それだけってわけじゃないし、その為の彼女なんて考えは大嫌いだ」

「ほんとうですか？」

私は友則さんのことをこれっぽっちも疑っていなかった。それでも聞いたのは、少しだけ必死に見える彼の様子が、ちよつとだけ可愛かったからだ。

「本当だ」

「えー？ そんなこと言つて、正美先輩にいけないことしてるんじゃないんですか？」

「おまつ」

彼が叫びかけたので、私はわざとらしくきやあと悲鳴をあげて身を引いた。

なのに、威勢のいい怒鳴り声も、嘆くようなうめき声も聞こえなかった。

友則さんは、小さくため息をついた。

「あのな、聖谷。俺と正美は、おまえが考えているような関係じゃあないぞ」

「どういうことですか？」

「いちいち説明するのもおかしいと思って訂正していなかったけど、とにかくそんなことをする間柄じゃないんだ」

「じゃあどんな関係なんですか？」

友則さんが言葉に詰まった。いい言葉が見つからないのか、視線を天井のほうに泳がせている。あ、目を閉じた。うーんとひとつな

りし、まぶたを開いた。

「……大事な、友達だよ」

「うそっぽいです」

これは正直な気持ちだ。

「とにかく、俺と正美は恋人とかじゃないんだよ」

さっきよりも必死さが増した友則さんは、なんだか誤魔化そうと
しているように見えた。

でも、もう許してあげよう。この話を追求するのはやめよう。代
わりにいいことを思いついたから。

「ふーん？　じゃあ、私が今からテストします」

「テストってなんの」

私は立ち上がって、椅子をよっこいしょと持ち上げ、

「先輩はじつとしてください」

彼の椅子にピッタリくっつけて置いて勢いよく座った。

おっかなびつくりしている友則さんを横目に見つめた。彼は私よ
りも頭ひとつと半分くらい背が高い。座っても頭一つ違うので、こ
れだけ近くに座ると見上げないと目が合わない。

手が汗をかいていた。心臓も痛いくらい早く鳴っている。半分は
昂揚感、半分は嫌な緊張からだ。あの時から、こんなに男の近くに
いたことはなかった。

「おい」

「黙ってください。絶対に動いちゃダメですからね」

私は正面を向いてから、恐る恐る体を傾け、友則さんの腕に自分
の腕を押し付けた。あつたかい。大丈夫だ、怖くない。

もう少し近づくと、夏服から露出していた部分が触れ合った。汗
ばんだ肌がぴつとりとくっついて、友則さんがピクツと動いた。お
もしろい。

「あつたかいです」

「暑いんじゃないのか」

「はい。でも、あつたかいです」

見上げると、友則さんがかなり困った様子で私を見下ろしていた。

「まだなのか？」

「まだですよ」

私は顔を下ろして、身をよじるように動かした。

ガタガタツと椅子が音を立てた。友則さんが逃げようとしたのだ。横から抱きついただけなのに。

私が背中から回した右手で彼の首を抱き、左手を腰に回してしっかり抱きついていたので、彼は立ち上がることもできずに身じろぎしただけだった。

さつきよりも、ずっとあつたかい。友則さんの体に押し付けた胸がつぶれて、少し痛かった。

「動いちゃダメです」

「そんなことを言ってもだな」

「動かないでください」

「……何がしたいんだ、おまえは」

それは問いかけじゃなくて、あきらめのようだった。友則さんの体から力が抜けていくのを肌ごしに感じる。私も力を抜いて、胸が痛くならないくらいの力で抱きつきなおした。

「先輩。どうして、私に先輩と正美先輩が恋人同士じゃないって教えてくれたんですか？」

「そうだな……どうしてだろうな。ただ、聖谷に誤解されたままにしておきたくなかったんだ」

「え……」

それって、どういう意味？

「今のおまえに、嘘はつきたくないからな」

これは、ただの優しさだ。友則さんは、優しいから、変なことを言った私を気遣ってくれただけなんだ。

そう頭ではわかっているけど、でも……私は、抱きつく腕に力を入れていた。

「私、先輩には同情なんてしてほしくありません」

「俺は同情なんてしてないぞ」

少し、怒ったような声だった。

「じゃあ、なんで優しいこと言うんですか」

「おまえこそ、どうしたんだよ。さっきから変だぞ。俺にだって何かあったんだろうなってくらいはわかる。話して楽になることもあるぞ」

話してしまおうか。一瞬、私はそう思った。そうしたら、友則さんは、もっと優しくしてくれるかな。

甘い空想は、だけど息をする間もなく変貌した。あの感触が、甦ってきた。

気持ちが悪い。ダメだ。とても話すことなんてできない。

彼の体にも嫌悪感を覚えて、私は体を離していた。ただ、彼のシヤツの腕と胸のところを掴んでいた。なぜそうしたかは分からなかった。でも今これを放したら、きっとこれからも同じ思いを感じてしまう気がした。

「いやだな、先輩。ちょっと失恋しただけです」

私は、明るい声を出すことに、失敗した。

「おまえ、なんで俺が優しいこと言うかって聞いたよな。今のおまえに、そうしないでいられるわけないだろ」

シヤツを握る手に力が入った。ほとんど頭突きをするみたいな勢いで、彼の胸に額を押し付けていた。

「それって同情ですよ」

「おまえ、何が嫌なんだよ」

友則さんの言うとおりだ。私、何が嫌なんだろう。どうして彼に同情されたくないのだろう……

よくよく考えてみて、気づいたことがあった。

「先輩は私に優しくしてくれます。でも、正美先輩にも、ほかのみんなにも先輩は優しいです」

そう、友則さんの優しさには分別がない。

「けれど、今の私みたいに惨めなコにはもっと優しくしますよね。」

他の人より優しくしてくれますよね」

そう、それはただ優しいからだ。

「そんなことされたら、単純なコなら先輩が好意を持ってってくれるって勘違いしますよ。でも、私は知っているんです」

そう、友則さんが優しいのは私を好きだからじゃない。

「先輩がそういう人だって知ってるんです」

でも、知っていても、気持ちが揺らぐのを止めることはできない。

「だから私は嫌なんですよ」

このままじゃ、好きになってしまいそうで……

「あつ」

不意に頭に手を置かれた。友則さんの手は大きくて、指がゴツゴツしていて、とても温かった。

すごく、気持ちがいい。

ぼんやりしかかったところで、別の手を肩に置かれた。

うわあ。この流れって、とってもよくないんじゃないだろうか。これからされるだろうことが頭をよぎった時、頭に置かれていた手が撫でるように動いた。

頭頂から後頭部にかけて優しくひと撫でされて、また意識がふわふわしかかった。

きつとこの後、その手は私の頬に触れて

「えっ」

友則さんの手は、また私の頭のでっぺんに置かれた。それも、ポンと叩くように。そして勢いよく撫でられた。髪がくしゃくしゃになるくらい無遠慮に。逃げようとしても肩を押さえられて動けない。首を振って逃れようにも、友則さんの手は執拗に追いかけてきて、力強く私の頭を撫でまくった。

「な、な、やめてくださいよ。ちょ、まっ、あわわっ」

変な悲鳴をあげながら手で追い払うようにしたら、ようやく撫でのをやめてくれた。肩をぐっと押されて、見上げなくても顔を合わせられるくらい離されてしまった。

友則さんは私の顔を見て、少し困ったように、でも楽しそうに笑っていた。

「おまえはごちゃごちゃと考えすぎなんだよ」

数瞬、何を言われたのか分からなかった。

その笑顔は何度か見たことがあった。

けれど、その笑顔が私に向けられたのは初めてのことだった。

まばたきしながらしばらく眺めていたら、笑みはゆっくりと訝しむ顔に変わっていった。

「大丈夫か？ 頭振りすぎたか？」

「だいじょうぶですよ。わたしがなにをかんがえすぎだっというんですか」

ほんととぜんぜん大丈夫じゃない。手をのせられた肩が熱い。肩だけじゃなく、全身が沸騰したみたいだ。頭の汗腺がいつせいに開くを感じた。

なんだろうこれは。

どうしてこんなふうになってしまっているのか、考えることがまったくできない。

なんでわたし。イヤだ。どうして まともに顔を見ることができなくなつて、私はうつむいた。

友則さんの椅子が、さりげなく遠ざかった。

「そうだなあ」

友則さんは窓の外に顔を向けて、腕組みをしていた。

さつきより十五センチ遠くにある横顔は、優しく微笑んでいるように見えた。

「例えば、俺と正美のこと。俺がみんなにどんな接し方をしているか。美観マップの清潔度評価にしてもそうだな」

友則さんがちらりと私を見た。

私はわざとらしく見えないように視線をはずした。

「どういう意味ですか？」

「おまえ、表層だけじゃ読み取れない、考えてもわからないことに

頭を回しすぎてるだろ」

「そんなことありませんよ」

「そうか？ 俺が思うにだな、おまえはもっとシンプルに物事を考えたほうがいいぞ」

「……えーと。それってまるで私がバカみたいじゃないですか」

馬鹿の考えはナントカって言うし。

むっとした思いで彼を見ると、こちらを見て苦笑いを浮かべていた。

「そうじゃなくて、もっと感性を大事にしたらどうだって意味だよ」
それって同じ意味なんじゃあ……？

私が黙ったままδειいたら、友則さんはいつもの笑顔になった。
胸が痛んだ。ああ、そうなんだ。この人はこんなに体が大きくて強そうだけど、どこか弱そうに見える。

うつん、寂しそうなんだ。

だから、私はこんなにもこの人を抱きしめたいと思うんだ。
抱きしめたかったんだ。

「聖谷！？」

腕のなかで友則さんが驚き声を上げた。私は椅子を蹴って立ち上がり、彼の頭を正面から抱きかかえていた。

少し遅れて、椅子が倒れた音がした。

「おまえ何考えて」

「先輩が言っただんですよ、気持ちや大事にしろって」

絡めていた腕を解くと、友則さんは静かな目で私を見上げてきた。近くで見ると、彼の目は少し色素が薄かったことに気づいた。琥珀というより、暗いベッコウの色合いだ。その黄色味がかった瞳に、私の顔が映っていた。緊張でこわばった顔をしている。

「好きです。付き合ってください」

友則さんの眉がかすかに震えた。

私は右手を友則さんの肩に置いて、身をかがませた。
息がかかるほど顔を寄せて、そっとまぶたを閉じた。

わずかに唇を開いて、首を少し傾げる。

そして、待ってみた。彼のほうからキスしてくれるのを。

胸が痛くなるほど激しく鼓動が繰り返し、すっかり頭に血が上った私にとって、それは永遠のような刹那だった。

不意に、胸の少し上が温かくなった。

友則さんの手だった。

やんわりと押し返された。

私は右手を落とした。彼の肩のぬくもりが残る手のひらを握りしめる。

これって、断られたってことなのかな……

目を開くと、友則さんはものすごく真剣な顔を真っ赤にしていた。

「ひじりだに」

「はいっ」

「返事、保留でいいか？」

断られたわけじゃないみたい、とほつとしたのは束の間のことだった。ここで保留にして間を置いていいものだろうか。友則さんの目をじっと見つめて考え、ようとしたけれど頭が回らなくて、私は口走っていた。

「ダメです」

いったい何を言っているんだろう。でも、もう引つ込みがつかない。

「今すぐ答えを聞かないと私が死んでしまいます」

少しだけ非難のニュアンスを含ませたら、友則さんは腕を組んで目を閉じて、うーんとうなった。

固く閉じたまぶた、深く皺を刻んだ眉間の奥で、何を考えているのだろう。

どれくらい待ったろうか。まだ胸がドキドキしていた。友則さんが私を見て、さっきよりずっと穏やかな顔で口を開いた。

「わかったよ。付き合おう」

いったい何を言ったのだろう。『ツキアオウ』そう聞こえた。ん、

つきあおう？

「付き合おうって言いましたか？」

友則さんの頬がさつと赤く染まった。あ、耳も赤い。ちょっと可愛い。

「言ったよ」

念のため、もう一度だけ聞いてみる。

「それはつまり、私と付き合ってくれてのことですか？」

友則さんは視線をふいつと外した。少し唇を突き出している。初めて見る表情だった。

「……頼むよ。あんまり何度も聞かないでくれ」

私はふらふらと友則さんから離れると、倒した椅子を起こして、元いた場所に置いた。それから座らずに、食べかけだった水ようかんを手にとつて口に入れた。全部。

甘い。甘すぎる。

すっかり冷めてしまったお茶でようかんを流し込んだ。そのまま一気に飲み干した。

「私、帰ります」

「え？ おま」

鞆を掴んだ私は、ただまっすぐにドアを目指した。友則さんが呼び止めたような気がしたので、急ぎ足になった。そのままの勢いで一階まで小走りに駆け下りていた。

少し息が上がって私は、よれよれと廊下のすみっこまで歩くと壁に寄りかかった。

壁がひんやりとして気持ちよかったが、なぜか部室でのことが思い返されて、頭が沸騰するかと思った。

ありえない……いくらなんでも、あれはない。自分の言動の全てを無かったことにしてしまいたかった。恥ずかしくて死んでしまいたい。そうだ。

明日からどんな顔をして会えばいいんだろう。ああ、せめてあんな逃げるようにして出てこなければよかった。そうしたら、どんな

ふつに付き合っかって話もできたかもしれないのに。

戻ろっかな……無理だ。それは、とっても気まずい。

『デンワダヨー』

その声は、私の鞆から聞こえた。ケータイの着信音だ。あわてて鞆を開くと、二回目が鳴った。

『ハヤクデター』

ケータイの背面液晶には新山先輩の文字　友則さんからだ。三回目が鳴る前にケータイを開いて通話ボタンを押した。

「……もしもし」

「聖谷」

私がそう思っているからなのか、友則さんの声は気まずそうに聞こえた。

「はい。なんですか？」

「あー、いや……また明日、な」

「はい。また、明日」

ケータイを耳に当てたままで、しばらく待つてみた。まだ何か言ってくれそうだったし、そうじゃなくても友則さんから切ってくれと思うたからだ。

我慢できたのは一分くらいだった。

「……先輩？」

「うん？」

「それだけですか？」

聞くと、電話の向こうで大きく息を吐いた音がした。

「なあ、俺たち付き合っただよな？」

それは確認の言葉だったが、私にはかすかに疑問の音色が交じっているように感じられた。

そう言えば、告白の返事に対して答えらしい答えを返していない。友則さんが不安に思うのも自然なことだ。

また頭の毛穴がぶわっと開いた。

「先輩！　さっきの件ですけど、冗談とかじゃないですから。よろ

しくお願いします」

「お、おお」

「失礼しますっ」

さっさと通話を切って、ケータイを畳んだ。そのまま鞆にしまおうとして、ふと思うことがあった。

ケータイを開きなおして、電話帳を呼び出した。

ボタンを押すたびに鳴る電子音が、今は楽しい。

「これで、よし」

電話帳に新しいグループを設定した。

新山先輩を友則さん書き替えて、グループを友達から新しいグループに変更した。

新しいグループ名は恋人だ。

ケータイのディスプレイを眺めていたら、頬が緩んでいるのに気づいた。

周りを見渡したが、人影は一つもなかった。どこか遠くから女の子が談笑する声が聞こえてきた。

私は胸にたまっていた息を吐き出して、ケータイを鞆にしまった。

寝る前にどんなメールを友則さんに送ろうか、なんて考えながら私は文化部棟の玄関へと向かった。

外はそろそろ夕方だというのに日差しが強かった。そして暑かった。

私の夏が、はじまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0651f/>

幸せは少ししかいない アナザーストーリーズ

2010年10月22日02時24分発行